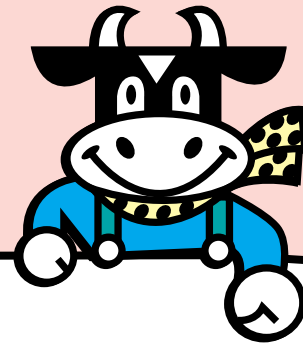




ワンポイント・アドバイス



子牛の下痢症

子牛共済がスタートして2年目となりました。子牛の診療では下痢の子牛をみる事が多いように思われます。子牛は成牛に比べて免疫機能が発達しておらず、また消化器機能も不完全で下痢を起こしやすい状態にあります。今回は子牛の下痢を引き起こす主な原因とその特徴について説明します。

未発達な消化機能

4週齢以下の子牛は消化吸収機能が不完全になりがちです。そのため腸内で異常発酵や腸内細菌の変化が簡単に起きやすい状態にあり、消化不良な軟下痢便（脂肪便）を示します。元気や哺乳欲は正常なことが多いですが、それ自体が下痢の原因となるだけでなく感染を受けやすい腸内環境を作り出してしまいます。

大腸菌性下痢症

一般に白痢と呼ばれ、生後2週間以内の子牛に多く発症します。元気、哺乳欲の低下に先立ち、^{39.5}前後の発熱を示し

ます。次いで腐敗臭のある黄白色〜灰白色の泥状下痢便を示し、さらに症状が進むと脱水と栄養状態の低下が進んで虚脱状態・削瘦していきます。また、毒素の強い大腸菌に感染した場合は重度の急性脱水症を引き起こし数時間から1日ほどで死に至ることもあります。

ロタウイルス下痢症

大腸菌性下痢と並び、よくみられる病原体です。生後2週間以内の発症が多く黄色水様便で悪臭を帯びることは無く、ミルク臭、ヨーグルト臭、微酸臭を示します。最初は^{39.5}前後の発熱を示し、下痢が長引くと脱水が進んで起立不能・虚脱していきます。適切な治療を行えば死亡率は低いですが。

クリプトスポリジウム症

11月〜4月の寒冷期に多発し、3日〜4週齢に発症が集中します。淡黄色〜淡緑色の水のような下痢便を示しますが、コクシジウムと異なり腸粘膜の表層しか

トは消毒薬に対して強い抵抗性があるのですが、熱と乾燥には弱いので熱湯消毒と石灰塗布を用いるのが効果的です。

サルモネラ症

6ヵ月齢以下の子牛が感染し、流行的に感染します。元気喪失、食欲廃絶、⁴⁰〜⁴²の発熱、悪臭のある血便を示します。また、鼻水や咳など呼吸器症状を示すこともあり、死亡率は80%に達することもあります。サルモネラ症は伝染病ですので、飼育場所の消毒や発症牛の隔離など速やかな対応が必要です。

コクシジウム症

4月〜7月に多発し、³⁰〜¹¹⁰日齢に発症が集中します。様々な性状の血便を呈し、発熱は軽度です。通常、5日前後の治療で好転しますが、それ以上の日数を要する子牛は下痢が慢性化し、削瘦・発育不全に陥ります。

寄生性下痢症

寄生虫による下痢で、黄褐色〜暗緑色の軟〜泥状便を示し、発熱は通常ありません。放牧され草を食べる5月〜11月に多発します。食欲は減退し、発見が遅れると発育不全になってしまいます。

子牛下痢症の原因と主要症状

原因	好発時期	主要症状
未発達な消化機能	4週間以内	灰白色のペースト・ゼラチン状便（脂肪便）。元気および哺乳欲は正常
大腸菌	2週齢以内	激しい水様性下痢・白痢。腐敗臭便。軽度発熱、元気喪失、脱水
ロタウイルス	2週齢以内	黄色〜黄白色の水様性下痢。ミルク臭。軽度発熱、元気喪失、脱水。
クリプトスポリジウム	4週齢以内 11〜4月	黄色の水様性下痢便。発熱なし、元気喪失、脱水。
サルモネラ	6ヵ月齢以内	悪臭のある黄色下痢便〜血便。食欲元気廃絶、高熱、脱水。死亡率高い。
コクシジウム	30〜110日齢 4〜7月	赤色水様性下痢便〜粘血便。軽度の発熱、食欲不振、元気喪失。
寄生虫	3週齢〜育成牛 5〜11月	黄褐色〜暗緑色便。放牧牛に多い。削瘦、発育不全。

実際の症例では複数の病原体が同時に感染していることもあり、この場合は症状が重篤になります。下痢が長引けば子牛が衰弱するだけでなく、その後の発育にも影響を及ぼします。

下痢を予防する手段として、出生後なるべく早期に初乳を与えて子牛の抵抗力

をあげることが勧められます（初乳の中には病原体を排除する働きを持つ成分がたくさん含まれており、子牛の初期免疫はすべて初乳から得ています）。また、不衛生な環境では病原体の巣で子牛を飼っているようなものですので、畜舎環境や哺乳器具の衛生管理を徹底することが下痢の発生を抑えるのに効果があります。



下痢を発症してしまった場合、元気・哺乳欲がある軽症例ではミルクを休止し代わりに経口電解質を与え、同時に整腸剤を給与します。経口電解質は栄養を十分含んでいないため、2日間を限度としたほうがいいです。下痢が長引いたり、脱水がひどい重症例に対しては、点滴による補液が必要です。直ちに獣医にみせてください。